

## ◇ 国 語

国 7-1～国 7-19 まで 19 ページあります。

第一問 次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

(二) 谷崎潤一郎の『細雪』に、「彼女たちがいつも平安神宮行きを最後の日に残して置くのは、此の神苑の花が洛中に於ける最も美しい、最も見事な花であるからで、丸山公園の枝垂桜がすでに年老い、年々に色褪せて行く今日では、まことに此処の花を惜んで京洛の春を代表するものはないと云つてよい」という一節がある。「彼女たち」とは、『細雪』の主要な登場人物である嵯岡家の姉妹達で、春には毎年京の桜を訪ねて花見を楽しんだのである。『細雪』は、太平洋戦争勃発の翌年の昭和一七年に書き始められたが、このときから二〇年後、川端康成は『古都』（昭和三六年）の中で、双子のヒロインの一人千恵子が恋人の真一とこの平安神宮の紅枝垂を見る場面を描き、その中に「まことに、この花において、京洛の春を代表するものはないと言つてよい」という『細雪』のこの一節をそのまま引用している。谷崎の昭和一〇年代においても、川端の昭和三〇年代においても、この紅枝垂れ桜が京の春の女王であることに、「美」を描く双璧とも言える二人の文豪がいれば、「お墨付き」を与えているのである。

そしてこの「お墨付き」は現代においても有効である。それは枝垂れ桜という桜は極めて長寿だからである。今日、日本の桜の八〇パーセントを占める染井吉野は、その寿命は五、六〇年と言われるのに対して、枝垂れ桜は条件がよければ何百年も生きるものがあり、福島県三春の紅枝垂れ「滝桜」は樹齢一〇〇〇年とも言われている。

(中略)

『細雪』に有名な場面を描いただけでなく、後述のように、足しげく桜を見に来てそれを筆に留めている谷崎と平安神宮との関わりは、どのように始まったのであろうか。それは谷崎二五歳の明治四五年四月、生まれて初めて京都を訪れ、その印象を「朱雀日記」と題して『大阪毎日新聞』と『東京日日新聞』に発表したときに始まる。この初の京都旅行の一年半前に、彼は初期の代表作『刺青』『麒麟』を同人誌『新思潮』に発表、『三田文学』誌上で永井荷風の激賞を受け、ブندان的地位を確立したばかりであった。京都市は新聞社が旅費を出し、代わりに京阪見物記を紙上に連載するという約束で行われたものであった。新聞社は、「悪魔主義」「不良少年文学」などと言われた、このデビューしたばかりの人気の若手作家に早速目をつけたのである。このへんは、一〇〇年前のマスコミも今のマスコミも変わらない。

何故谷崎はいち早く平安神宮にソウグウしたのか、それを説明しておこう。このとき谷崎が京都に着いたのは、四月上旬の雨の

午後であつた。「宿を取るにも、見物するにも、一向勝手が分らない」彼は、大阪毎日の支局を指す。「雨はいよ／＼土砂降りになつて、陰鬱な京の小路の家列に瀟々<sup>しやうしやう</sup>と濺<sup>ま</sup>ぐ」、「渋のように燻<sup>くす</sup>んだ色の格子造りが軒を並べ、家の中は孰<sup>じゆう</sup>れも真暗で、何百年の昔の匂が瓦や柱に沁み込んで居る。到る所に仏師の住居の見えるのも、私には珍しくなつかしかった」(「朱雀日記」以下同じ)と谷崎は書く。烏丸<sup>からすま</sup>通りを通つたと思われるが、当時の京都の様子が窺<sup>うかが</sup>えて興味深い。電車路を拡<sup>ひろ</sup>げている四条通りを横切り、三条の御幸<sup>ごこう</sup>町角の新聞社(毎日)へ着く。

この日の宿は木屋町の旅館で、通された二階座敷の縁の外には加茂川<sup>かものがわ</sup>が流れ、対岸は宮川町の色里であつた。夜になると、雨の中を太鼓、三味線、鼓の音が川に響いて、電燈<sup>でんとう</sup>の光がきらきらと水に輝く。彼は「静かで勉強が出来て、夜遅く帰つてもかまわぬような宿屋を周旋<sup>しゆせん</sup>してくれろ」と手紙で注文してあつたが、「勉強」はともかく「夜遊び」にはぴつたりの宿であつたようだ。以下、翌日のことである。

昨日の雨がからりと上がつて、うら／＼かな光が対岸の家々の豊<sup>いづか</sup>に輝き、加茂川の水が暖かそうに流れて居る。宿の二階<sup>ふたばい</sup>に坐りながら、遠く東山を望むと、濃い霞<sup>かすみ</sup>の中に清水寺<sup>しみずみでら</sup>の朱塗の堂が見える。八坂<sup>やさか</sup>の塔も見える。

今日は「毎日」の東野さんに連れられて岡崎の上田敏先生を訪問する筈<sup>はず</sup>である。昼飯を食うと、まだ約束の時間にならないので、ぶらりと宿を飛び出し、一人ぼか／＼と四條の橋を渡る。……／＼「町を見物しながら、ぶら／＼歩いて参りましょう」／＼と背のひよる高い東野さんが、丸々と太つた私と列<sup>な</sup>んで、三條通りを東へ進む。……／＼途中、昔の大極殿<sup>おほたいごくでん</sup>を模した平安神社に参る。新しい丹塗<sup>にぬり</sup>の建築で、丁度歌舞伎の大道具を見るような感じはあるが、一概<sup>いっさい</sup>に俗悪の名を以て却<sup>しりぞ</sup>ける事は出来ない。古い神社仏閣の維持保存に努めると同時に私はこう云う Reproduction も非常に興味深く思う。青々と晴れ渡つた空の色が、鮮やかな丹塗の柱と相映<sup>あひま</sup>じ、翼の如く左右に伸びた廻廊<sup>かいろう</sup>の石塋<sup>いしだん</sup>にうら／＼と春の日の漂う美しさ。平安朝初期の、雄大瑰麗<sup>きうたいけいれい</sup>な内裏<sup>うちり</sup>の佛<sup>ほとけ</sup>や、廟堂<sup>びやうどう</sup>の有様が、まぎ／＼と眼の前に泛<sup>うか</sup>んで来るような心地がする。

平安朝の芸術を愛するよりも、平安朝の生活に憧れる人々に取つて、此の建物は絶好の企てであらう。私は京都に滞在して居る間、何度も／＼此処を訪れて、ジツと石塋<sup>いしだん</sup>に腰を据えつゝ遠い古えを偲<sup>しの</sup>ぼうと思つた。

京都へ来て二日目この日、谷崎は新聞社の人の案内で、上田敏を自宅に訪問することになつていた。上田敏は、カール・ブツセの「山のあなたの空遠く……」などの名訳で知られる訳詩集『海潮音』(明治三八年 本郷書院)で有名な文学者で、当時京都

帝国大学教授であった。上田は永井荷風とともに谷崎の作品を最初に認めた人で、谷崎が来ているなら会いたいと上田の方から誘いがあつた。上田の住んでいた岡崎広道入江は、平安神宮の社前の一带にあつたから、このとき時間つぶしの谷崎は、極めて自然に平安神宮に導かれたと言える。

この「朱雀日記」の一節を一読して感じるのは、谷崎の平安神宮への感想が **ア** なことであろう。平安神宮（当初は「平安神社」）は、創建以来、その鮮やかな色彩やメイリョウな形が、古都にそぐわない俗悪なものと批判された。

これに対して、谷崎はなぜ違った立場をとることができたのか。一つには、彼が関東の人間で、かつ二〇代の青年だったからだ。谷崎は東京日本橋の生まれで、卒業した学校（坂本小、府立一中、一高、東京帝大）もすべて東京であり、生活の地はずっと関東であつた。（彼が関西人であつたのは、大正二二年の関東大震災に箱根であり、直後関西に移住して以後である）。平安神宮の社殿を新奇で俗悪と感じる、地元的かつ **イ** な感覚からは自由であつたのだ。また潤一郎の美意識が、〈わび〉や〈さび〉にのみ与しないシンビ的、耽美的傾向のものであつたことも一因と思われる。

（中略）

そもそも平安神社はどのように創建されたのか。この神社は、明治二八年平安京遷都千百年祭に際して、京都市民全体の氏神として新たに構想されたものである。そこには明治二年の東京への遷都以後、政治的には勿論経済的、文化的にも地盤沈下が著しかつた京都の起死回生を図るという意図があつた。毎年一〇月二二日に行われる時代祭は、この新しい神社の祭礼である。華麗な社殿は平安京大内裏を約八分の五に縮小したもので、大鳥居の後ろの神門は応天門を、その奥の外拝殿は大極殿を模している。拜殿の左右には回廊が延び、蒼龍楼（東）と白虎楼（西）が配されている。総社域は約二万坪、背後に紅枝垂れ桜がある約一万坪の回遊式庭園「神苑」がある。

だが一つ、谷崎の平安神宮には不思議なことがある。この初めての平安神宮参拝は、四月の春の時節だったのに、**枝垂れ桜**は「朱雀日記」にどうして出て来ないのか。後に回想的に書かれた「青春物語」（昭和七年）にも枝垂れ桜の記憶は留められていない。まだ平安神宮に植えられていなかったのだろうか。

枝垂れ桜は、平安時代には糸桜と呼ばれ、エドヒガン系の桜の一つである。細い枝が下に垂れるところからの名だが、その原因は植物ホルモンの微妙なバランスの違いによるという。平安神宮のものは、有名な京の桜守によれば、関西に珍しいひときわ紅の

濃い花卉の多い品種であるため、紅八重枝垂れ桜と言われて珍重された（『京の桜』佐野藤右衛門 平成五年 紫紅社）。

その来歴については、二つの説があるようだ。両説とも明治二八年、平安神宮創建のとき、当時の仙台市長遠藤庸治により仙台から七〇本の苗木を移植したものである。そのためこの桜は、かつては陸奥桜とか遠藤桜とも言われた。しかしもとをたどればこの仙台の桜は、京都のものであった。ここで二つの説に分かれる。『京の桜』の佐野説は、御所にあったものを伊達政宗が持ち帰ったもので、今も仙台の榴岡公園には、政宗の時代の老木が数本見られるそうだ。一方平安神宮の神官の方に直接聞いた話では、近衛殿（現御所の北辺の通りをはさんで北側）にあったものを津軽藩の藩主が持ち帰り、これが仙台に伝わたとされる。但し津軽から仙台へのルートの詳細は不明という。

白虎楼から入る西・中神苑への創建時の移植は資料に確実だが、大正三年に作られた橋殿がある東神苑は不明である。しかし谷崎が来たこの時点で、西神苑と中神苑には桜はあったわけだが、その存在を多分知らなかったのである。

谷崎がこの紅枝垂れを見たのは、大正一二年関東大震災後に関西に引っ越して来てからはなかったか。そしてヒンパンに訪れるようになったのは、根津松子と結婚した昭和一〇年以後と思われる。

（海野泰男『文豪と京の「庭」「桜』』による）

（注）大極殿……大内裏朝堂院諸殿舎の北方に建つ正殿。中央に高御座たかみくらを設けて天皇の御座とし、即位・大嘗会だいじょうえなどの重要な行事が行われた。

問一 傍線部A・B・C・D・Eと同じ漢字を含むものを、次の各群の①～⑤の中からそれぞれ一つずつ選べ。

A ブンダン

- ① ショウダン試験を受ける
- ③ ゲキダンに所属する
- ⑤ 値下げをダンコウする

- ② 庭のカダンを手入れする
- ④ ダンガイ裁判所

1

B ソウグウ

- ① 大言ソウゴする
- ③ 冬山でソウナンする
- ⑤ 不安をイツソウする

- ② 飛行機をソウジュウする
- ④ 行方不明者をソウサクする

2

C メイリョウ

- ① 病院でリョウヨウする
- ③ ドウリョウとの会合
- ⑤ 悪鬼がチョウリョウする

- ② リョウゼンたる事実
- ④ 褒美をハイリョウする

3

D シンビ

- ① 原案をシンギする
- ③ シンシユク性のある布
- ⑤ 地震によるシンドウ

- ② 病院のシンサツ室
- ④ シンシ的なふるまい

4

E ヒンパン

- ① 人心のリハンした政治
- ③ ハンザツな手続き
- ⑤ 水草がハンモする

- ② 下級生のモハンとなる
- ④ 商品をハンニユウする

5

問二 空欄  ・  に入る最も適当なものを、次の各群の①～⑤の中からそれぞれ一つずつ選べ。

- ① 感傷的
- ② 抽象的
- ③ 好意的
- ④ 短絡的
- ⑤ 客観的

- ① 普遍的
- ② 革新的
- ③ 必然的
- ④ 保守的
- ⑤ 芸術的

問三 傍線部 (a) 「川端康成」が書いた作品を、次の①～⑤の中から一つ選べ。

- ① 春琴抄
- ② 暗夜行路
- ③ 金閣寺
- ④ 雪国
- ⑤ 門

問四 傍線部 (b) 「お墨付き」、(c) 「周旋」の意味を、次の各群の①～④の中からそれぞれ一つずつ選べ。

- (b) お墨付き
- ① 文筆活動を行う者が与える保証
- ② 歴史に精通した者が与える保証
- ③ 権威のある者が与える保証
- ④ 風流を解する者が与える保証

(c) 周旋

- ① 交渉事に関して、当事者間に立って世話をすること
- ② 目的とするものを幅広く探し、見つけ出すこと
- ③ 複数の候補を比較検討し、最も良いものを選ぶこと
- ④ 前々から計画を立てて、用意周到に準備すること

10

問五 傍線部(一)「谷崎潤一郎」に関する本文の記述にあてはまらないものを、次の①～④の中から一つ選べ。

- ① 谷崎は『刺青』等の作品によって若手作家としての地位を確立し、『悪魔主義』と称されて注目を集めた。
- ② 谷崎は初の京都旅行の費用を新聞社から出してもらい、現地での見聞をもとに『朱雀日記』を執筆した。
- ③ 谷崎は幼少時に故郷である関西を離れて東京へ移住したが、関東大震災の直後、再び関西へと引越した。
- ④ 谷崎は初の京都旅行で上田敏の家を訪問することになり、その近辺を散策する折に平安神宮へ立ち寄った。

11

問六 傍線部(二)「この『お墨付き』は現代においても有効である」とあるが、その説明として最も適当なものを、次の①～④の中から一つ選べ。

- ① 平安神宮の桜が京都を舞台とする小説の題材として、現代もなお親しまれているということ
- ② 平安神宮の桜が京都における長寿の象徴として、現代もなお尊崇されているということ
- ③ 平安神宮の桜が京都の歴史的遺産の一つとして、現代もなお注目を集めているということ
- ④ 平安神宮の桜が京都の春を象徴する風物詩として、現代もなお愛されているということ

12



問七 傍線部(三)「一概に俗悪の名を以て却ける事は出来ない」とあるが、その理由として最も適当なものを、次の①～④の中から一つ選べ。

13

①平安神社(平安神宮)には平安朝初期に建造された神社仏閣と同じ荘厳な雰囲気は漂っており、雄大な空と美しい建築が相映する様を見ながら、遠い昔を偲ぶことができるから。

②平安神社(平安神宮)の新しい建築と青空が相映する様や石甃に日が漂う光景を見ると、まるで平安朝初期の内裏や廟堂を目の前に見ているかのような気持ちになれるから。

③平安神社(平安神宮)の新しい丹塗の建築は歌舞伎の太道具のように派手であるが、神社の中に舞台風の華やかな意匠を取り入れるという発想が新鮮で、興味深く思われるから。

④平安神社(平安神宮)の鮮やかな色彩は、京都の古い街並みの中にあつてひととき目立つ存在であり、その新奇な表現こそ伝統的な美を超越する可能性が感じられるから。

問八 傍線部(四)「枝垂れ桜は「朱雀日記」にどうして出て来ないのか」とあるが、その疑問に対する筆者の推定として最も適当なものを、次の①～④の中から一つ選べ。

14

①枝垂れ桜はすでに植樹されていたが、谷崎がその存在を知らず、桜のある場所に行かなかったからではないか。

②枝垂れ桜はすでに植樹されていたが、谷崎にとっては建造物の美しさの方が強く印象に残ったからではないか。

③枝垂れ桜はちょうど植樹されている最中であり、谷崎がそれを景観の一部として認識しなかったからではないか。

④枝垂れ桜はまだ植樹されていなかったため、谷崎がその存在を書くこと自体が不可能だったからではないか。

問九 本文の内容と合致するものを、次の①～④の中から一つ選べ。

15

①平安神宮の枝垂れ桜については、派手な色彩が古都に似合わないという批判の声も出ていたが、谷崎はむしろその艶やかな色合いにこそ古い時代を思わせる美しさがあると考えた。

②枝垂れ桜は長命ではあるものの移植が難しい品種であるため、明治期より次第にその数が減少していき、現在では日本の桜の約八〇パーセントを染井吉野が占めるようになった。

③平安神宮の桜の来歴については二つの説があるが、京都にあった桜が仙台に伝わり、その桜が仙台市長の手を経て平安神宮に移植された、という認識においては共通している。

④佐野藤右衛門によると、平安神宮の桜は植物ホルモンのバランスが他の枝垂れ桜とは微妙に異なり、紅が濃く花卉の多い花を咲かせることから「紅八重枝垂れ桜」として珍重されたという。

第二問 次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

あなたはなぜ、そこまで日本語にのめり込むのかという問いに対して、ぼくは一度も聞き手が満足するような答えを返したことがない。答えのかわりに少し子供時代のことを書けば、ぼくは物心ついた頃から十二歳まで、外交官だった父に連れられて台湾、香港に住んだ。台中の旧日本人街にあった家で、これは日本人が造った家だという話を子供の頃に聞いて育った。日本人が引き揚げた後の、日本の亡霊がいるようなところが、ぼくの育った家だった。自分の育った家が、自分の国家ではない国にある、その家を離れ、書類上の母国であるアメリカへ帰ることが、ぼくの中にズレの体験を生んだ。

近代日本の、最後の近代らしい時期であった一九六〇年代末、初めて日本に渡った。ぼくは子供でもなければ、大人でもなかった。西洋人としての人格が完成されているようで、完成されていない段階ニにおいて、日本に**来られた**ということが、ぼくにとってすべての出発点となった。

東京の風景、日本の自然、日本人との関係、その中に流れている日本語という言葉にぼくは触れた。十七歳のころ、誰かの下宿に行つて朝まで話し込んだことがある。十人のうち、ぼく一人だけが日本人ではなかった。話は一、二割しか理解できなかったが、黙って聞いていた。下宿の六畳間の空気の中で、言葉が形となつて飛び交っているのが見えたような気がした。教科書の言葉ではなくて、感情を伴った言葉だった。これは何だろうと好奇心以上のものに衝き動かされた。これを自分のものにしたいたいという思いにかられた。

それからは、喋れるようになるまでじつと日本語に耳を傾け、書けるようになるまでひたすら日本語を読んだ。二十年の月日が流れた。欲求不満がふつふつと沸いてきて、ぼくの心のなかでハツコウハしていた。

日本文学研究者になつたぼくに「おまえも一緒に書け」と言ってくれる日本の文学者はいなかった。むしろ、書けるなんて思えうな、**ガイジン**のくせに日本語で喋るな、という声をヒステリーぎみに浴びせられることもしばしばだった。この国でのぼくの

役割はと問えば、「翻訳して、われわれにノーベル賞をとらせてくれ」と言外に、ある時は ア、彼らは言った。

日本人だけではない。日本にいる欧米人の中にも、日本語を書こうとするべくを変な目付きで見る人が少なくなかった。日本語を喋り、書くことが近代の日本人のアイデンティティだったとすれば、在日ではなく滞日の欧米人のアイデンティティは日本にいながら日本語を喋らないこと、英語を喋りつづけることにあった。それが、この島国に生きる彼らの生活の知恵であり、実際、職業でもあった。ぼくは日本語を書くことで、彼らのアイデンティティをも揺さぶることになったのだ。現に、越境の意思を捨ててしまったほうが歓迎されることに気が付き、上手に立ち回っている滞日外国人も多かった。反対に、ぼくは境を越えたことで、彼らからも拒否反応にぶつかった。

一九八〇年代後半、日本語は外からの越境者との関係のなかで、さらに豊かになるだろうと考える日本の文学者が、少数ながら現われはじめた。中上健次のように、「おまえも一緒に書け」とぼくを焚き付けておきながら、作品にヨウシヤない批判を浴びせた人もいた。日本語に対するガイジンの思い込みにすぎないという中傷は一度も聞かなかつた。二十年近く日本語を書けない欲求不満のかたまりでいたぼくにとって、それはいちばんうれしいことだった。

文学の世界では、文化の外から内へというこの越境の動きが、地球上のあちこちでほぼ同時に起こつた。英文学では、サルマン・ラシユデイ、カズオ・イシグロ、ベン・オクリといった、アングロサクソンの一員でない作家たちが、生粋のイギリス人として生まれた作家よりもドクソウ的な作品を発表するようになった。日本人の多和田葉子がドイツ語で小説を書き、「私はドイツ語の歴史をつくっている」と発言した。彼女のコメントを感動をもって読んだのは、ぼく一人ではなかつたはずである。

さらに正確を期していえば、越境は、ある文化の外部にいる者にだけ起こるのではない。日本人として生まれた人でも、日本語を書くためには、一度、「外国人」にならなければだめなのだ。「当たり前な日本語」の「外」に立って、自分の言葉に異邦人として対する意識をもたなければよい作品は生まれない。これは、一流と呼ばれる日本の作家なら誰もが感じている今日的な表現の問題である。日本では、そういった普遍的な問題が、文字を通して、ほかの国よりもはっきりと浮かび上がっているのではない。地球レベルで表現することの重要性。その一つのモデルを、この鎖国の歴史をもった島国が提供するようになっている

のではないだろうか。

日本文学者としてのぼくの専門は、『万葉集』である。日本に移り住む以前は、一年のちようど半分を日本で暮らし、新宿の街をうろついたり、小説を読んだり、『万葉集』を英訳したりと、かなり自由な時間を過ごしていた。残りの半分はアメリカに戻り、スタンフォード大学などで教鞭をとる。そんな生活が十六、七年続いた。

相互フカシンの小さなテリトリーを守る日本の大学の研究と違って、アメリカの大学では古典文学といえば、『古事記』『日本書紀』から江戸文学までやる。おまけにぼくは近代文学、現代文学もやっていたから、『万葉集』研究者のぼくが、朝は『日本書紀』午後は大江健三郎を講じたこともある。日本語の表現史の千三百年を半日の間にオウカンする。そんな講義を続けていると、日本語の独自性がよくよく見えてくる。ぼくが当時、アメリカの大学でやっていた講義のスケールは、日本語の歴史性に即してごく自然なことだったと今でも思っている。ある意味で、日本語で表現するということは、おのずから『万葉集』や『源氏物語』の流れの中に入ってしまうことだからだ。

話し言葉としての日本語は、独自でも何でもない。世界に数千ある言語の中の一つにすぎない。日本語に独自性があるとすれば、書き言葉、イ文字だ。

よく知られているように、漢字は中国から来たものだが、日本はその漢字を崩してしまった。文字が外から輸入されてから、そのまま使われることなく、形を変えられたという事実がある。技術的にはるかに進んだ強大な大陸帝国と接触した際、その防衛手段として発明されたのが、平仮名だった。平仮名は、日本にもともとあった文字ではなく、外部から輸入された漢字を崩してできた。漢字を遊ばせてつくってきたともいえる。その歴史はスキヤンダラスといえはスキヤンダラスだが、その屈折のうち日本語の独自性はある。

たとえば、英語はヨーロッパの言葉で、ヨーロッパの内部で生まれたアルファベットで綴られる。ハングルは韓国語という母国語を表記するために、世宗大王が言語学者たちに人工的につくらせた文字だ。

ハングルを書きたいと思ったことは一度もない。ハングルを書くこととアルファベットを書くことはほとんど変わらないとぼ

くは思う。ところが、日本語を書くということは、書く人の国籍が何であろうと、その屈折の歴史にみずから参加することを意味している。書くのは現代の日本語であつても、その背後には『万葉集』や『源氏物語』の時代から続くズレとしての言葉の伝統がある。

ぼくは、日本語の歴史の一部になりたかつた。英語でも書ける内容を日本語で書くのではなく、日本語を書きたい、日本語をつくりたい、と思つた。日本語を書くことに、ぼくはほとんど一つの**エロス**を感じるのである。

**ウ**、日本では明治以降、このような日本語の歴史性が日本人自身の目から覆い隠されてしまつた。外国人が言葉の次元で日本人になることはありえないという妄想が、以後、一世紀以上この国を覆つてきた。それは、日本語の長い歴史に照らせば、異常な事態だつたといふことができる。

八〇年代から九〇年代にかけて、数十万のニューカマーが加わつて、あるいは百万以上の外国人が日本に住み、日本で仕事をするようになった。東京で山手線に乗れば、ほぼ一輛りょうごとに外国人がいて、しばしば席を隣り合わせるといふ一つの日常性が生まれてきた。外国人の顔を見て驚く人はいなくなつた。ところが、その外国人がごく自然な日本語で喋りはじめると、びっくりする人が圧倒的に多い。

企業にしても、**エ**が確実に進んではいる。一流企業の役員クラスの中にも欧米人だけでなく、数はわずかだが、高学歴のアジア人のエリートがいる。他方、日本社会の底辺に居るのは今や数十万人にのぼるアジア出身の労働者だ。

では、中小企業に外国人の課長がいるかという、いない。九割以上の日本人にとって、身近な場では外国人との付き合いはない。いくら国際化しているといつても、いったん山手線を降りてしまえば、外国人と付き合う日常性は存続しないのだ。

明治以降、日本の近・現代史はあまりにも劇的に展開した。アジア全土に帝国を拡大しようとして、やがて完璧な敗戦を迎え、その四十年後にはまた世界一の経済大国だと思ひ込み、そう思ひ込んで五、六年もたたないうちに風船はしぼんだ。極端から極端へとぶれすぎて、国民経済がしぼんだ今も現実が見えにくくなつていふことがあるかもしれない。

これはぼくのまつたくの憶測にすぎないけれど、これから先の運命は日本人にとつていちばん辛いものになるのではないか。

世界一になることもなければ、小国に戻ることもない。その間、中間国家を生きたという体験は、近代百年の日本人にかつてなかったことだ。

その意味で、阪神大震災、地下鉄サリン事件などの九〇年代の大事件に染まりきったマスコミの報道ぶりは興味深く、不安にもなった。バブル時代の過剰な自信が完全に裏返って過剰に悲観的になり、ひたすら国内の被害に目を向け、鎖国的なものさえ見え隠れしていたように思う。だが、震災にせよ、サリン事件にせよ、日本人が被害にあうところでは、在日外国人もいっしょに被害にあう時代になったことを、図らずも証明している。日本人がこれから体験することは、ことごとく在日外国人によって共有されるだろう。

もしかすると、在日外国人も参加する、新しいナショナリズムが生まれる可能性もあるかもしれない。ぼく自身、今や日本の一員として、そんなナショナリズムの可能性について考えることがある。「甲」とか「乙」という十九世紀の発想ではなくて、「丙」と「丁」という二十一世紀の発想に基づいた愛国心。少なくとも、アイデンティティをもう少し柔軟に幅広く考えることが、これからの日本人に求められることは確かである。

(リービ英雄『日本語を書く部屋』による)

問一 傍線部A・B・C・D・Eと同じ漢字を含むものを、次の各群の①～⑤の中からそれぞれ一つずつ選べ。

A ハツコウ

- ① 理不尽な態度にゲキコウする
- ③ コウナン取り交ぜて話す
- ⑤ キツコウ模様

② 王朝を救ったチュウコウの祖

④ コウボ菌を培養する

16

B ヨウシヤ

- ① 罪人がシヤメンされる
- ③ シヤフツして消毒する
- ⑤ ゴウシヤな暮らしを送る

② 集落への道がシヤダンされる

④ 個別の事情をシヤショウして考える

17

C ドクソウ

- ① 天皇に意見をソウジョウする
- ③ 独立宣言をキソウした人物
- ⑤ セツソウなく信念を変える

② 戦地でジュウソウの手当てをする

④ ソウテイに凝った書物

18

D フカシン

- ① 床下までシンスイする
- ③ 地域産業のシンコウに尽くす
- ⑤ 領空シンパンに警告する

② 世間をシンカンさせる事件

④ 新型フェリーのシンスイ式

19

E オウカン

- ① イツカンした態度
- ③ 王座をダツカンする
- ⑤ 貴金属をカンテイする

② 困苦にカンゼンと立ち向かう

④ カンゼン懲悪の物語

20



問二 空欄 [ア]・[イ]・[ウ]・[エ] に入る最も適当なものを次の各群の①～⑤の中からそれぞれ一

つずつ選ぶ。

[ア]

① あられもなく  
④ 性懲りもなく

② 柄にもなく  
⑤ 臆面もなく

③ にべもなく

[ 2 1 ]

[イ]

① つまり  
④ たとえば

② むしろ  
⑤ そのうえ

③ 実は

[ 2 2 ]

[ウ]

① なぜなら  
④ ところが

② とりわけ  
⑤ 要するに

③ このように

[ 2 3 ]

[エ]

① 若年化  
④ 高学歴化

② 多民族化  
⑤ 均質化

③ 能力主義化

[ 2 4 ]

問三 傍線部 (a)・(b) のことばについて、本文中で定められた意味として最も適当なものを、次の各群の①～⑤の中からそれぞれ一つずつ選べ。

(a) ガイジン

- ① 日本以外の国籍を持つ人
- ② 文化的に断絶した部外者
- ③ 相互理解の可能性のある他者
- ④ 尊重すべき別の文化の体現者
- ⑤ 日本語を母語としない人

25

(b) エロス

- ① 自身の名のルーツへの郷愁
- ② 公序良俗を逸脱した行為
- ③ 偏愛による止まない欲求
- ④ 人生を賭すべき執着
- ⑤ 抗いがたい背徳的魅力

26

問四 空欄 甲 と 乙、丙 と 丁 に入れる語の組み合わせとして最も適当なものを、次の

①～⑤の中から一つ選べ。

甲 — 乙 丙 — 丁

- ① 民族 — 人種、 言語 — 文化
- ② 民族 — 言語、 文化 — 人種
- ③ 民族 — 人種、 言語 — 国籍
- ④ 言語 — 文化、 民族 — 国籍
- ⑤ 言語 — 文化、 民族 — 人種

27

問五 傍線部(一)「完成されていない段階において、日本に來られたということが、ぼくにとってすべての出発点となった」とは、どういうことか。最も適当なものを、次の①～④の中から一つ選べ。

28

- ①他の滞日欧米人とは異なり、日本語を自分のものとし、日本語で書くこととする越境者になろうとしたのは、西洋人としての人格が完成される前に日本に來たことによるところが大きいということ。
- ②英語の成熟した使い手となる前に日本語に触れることができたため、越境者たるに十分な日本語能力を身につけることができ、日本語を書く者としてのアイデンティティを持てたということ。
- ③日本に來たのが西洋人としての人格完成前であったため、日本語を喋り、書くことができるようになれば日本人からもアイデンティティを同じくする者として容易に受け入れられたということ。
- ④日本の気配の残る台湾の家で育った筆者にとっては日本こそが故郷であり、西洋人としての人格が完成する前に來日したことで日本人のアイデンティティを持てたのは幸運だったということ。

問六 傍線部(二)「それはいちばんうれしかった」とあるが、中上健次のような日本の文学者に作品を批判されることがなぜうれしかったのか。最も適当なものを、次の①～④の中から一つ選べ。

29

- ①著者の作品が日本語に対する思い込みにすぎず、日本人の感覚からはかけ離れていることに気づけたから
- ②後から身につけた日本語で書かれた作品は稚拙であったが、文学者の厳しい指導によって上達できたから
- ③日本の文学者が外からの越境者である筆者を日本語の表現者として認め、文学者として同格に扱ってくれたから
- ④日本の文学者に批判されることで、越境する文学者としての独自の立場を確立することができたから

問七 傍線部(三)「その屈折の歴史にみずから参加する」とはどういうことか。最も適当なものを、次の①～④の中から一つ選べ。

①自分で日本語を書くということは、屈折した独自性の強い話し言葉である日本語を使う者として言語の歴史の一端を担っているということ。

②外から輸入した漢字をそのまま使わずわざわざ形を変えろという屈折した方法は、現在も日本語の中で外来語などに見られるということ。

③漢字は日本語において字と音のあいだにズレがあるが、日本語を書くということはこのズレを維持する歴史を作ることであるということ。

④大陸の言語を表記するための漢字を崩して日本語表記に使用することで言語文化を保持しようとした屈折した歴史の一部になるということ。

30

問八 本文の内容と合致するものを、次の①～⑤の中から一つ選べ。

①日本文学の独自性は、外からの越境者が生粋の日本人作家と肩を並べて個性あふれる作品を生み出す点にある。

②話し言葉としての日本語は、数千ある世界の言語の中でも稀有な構造と屈折した歴史を持つ特殊な言語である。

③よい作品を生むためには、日本人でも一度日本語に対して外部から対峙する意識を持つことが必要である。

④韓国語のハングルは、平仮名と同様に漢字を変化させて韓国語の音を表記できるように作られた文字である。

⑤急激に企業や都市が国際化し、日本人の多くが身近な場でも外国人との付き合いがある生活を送るようになった。

31